



当院における糖尿病患者の 自己効力に関する調査を踏まえて (第2報)

—患者会立ち上げ、地域勉強会の取り組み—

武田クリニック 内田 恵



目 的

前回当学会において武田クリニックにおける自己効力感刺激要因尺度を測定し、当院糖尿病患者において、「遂行行動の達成」と「代理的体験」の不足が明らかになった。

今回その結果をふまえた当クリニックの取り組みを報告したい。



研究方法

1) 研究対象

3ヶ月以上当院へ通院歴がある患者の中から、無作為に抽出した
130名

2) 調査方法

「自己効力感刺激要因尺度」に基づくアンケート調査

3) 調査期間

第1回平成15年4月14日～平成15年4月25日

第2回平成16年5月14日～平成16年5月25日

4) 倫理的配慮

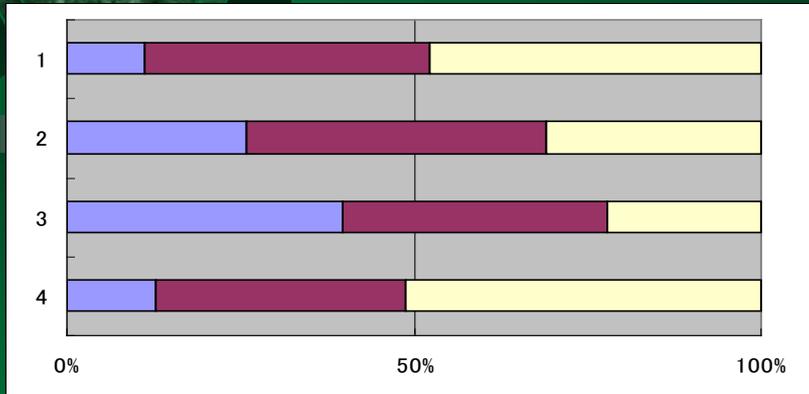
調査への参加や中断は自由意志であり、それによってなんら不利益を被ることはない、調査結果は統計的に処理するため個人の名前や回答が公にならないことを口頭および書面にて説明し、同意が得られた場合には署名をいただき施行した



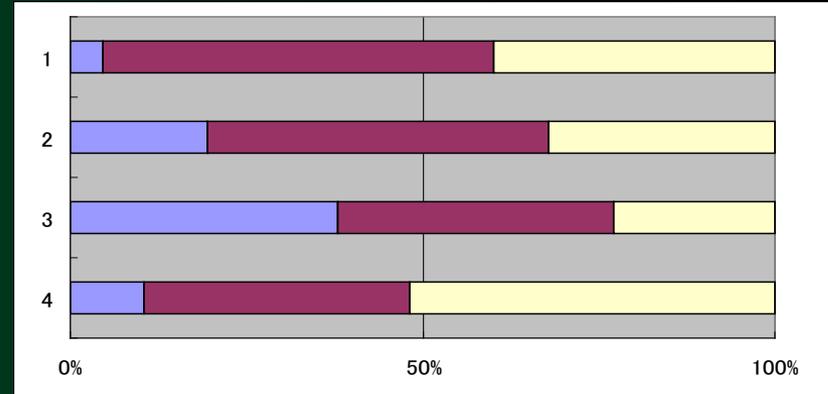
対象者の背景

- 男性: 83名 女性: 37名 総数: 120名
- 有効回答率: 92.3%
- 平均年齢: 57.75 ± 11.97 歳
- HbA1c: $7.0 \pm 1.1\%$
- BMI: $24.71 \pm 3.96\%$
- 病歴: 8.8 ± 6.3 年

遂行行動の達成(1回目)

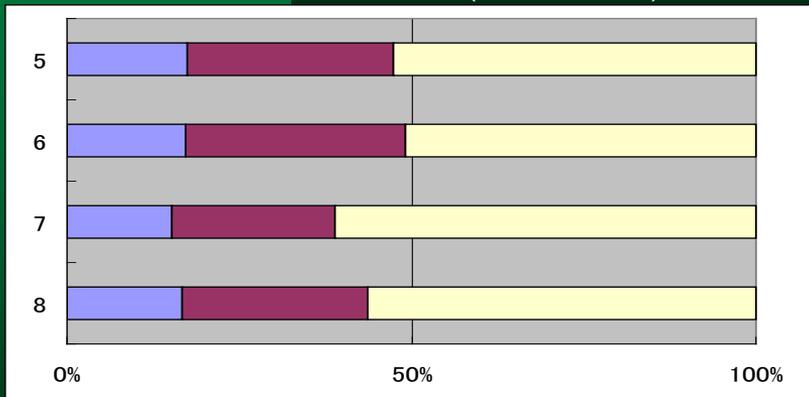


(2回目)

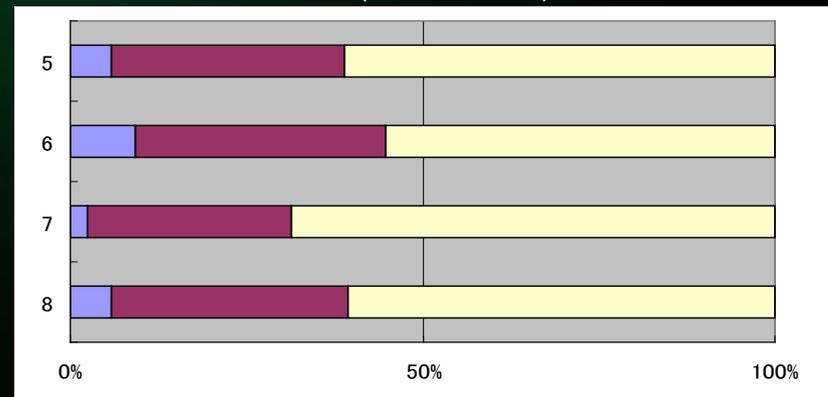


1. 1日の食事内容を食品交換表の表1～表6、付録に分けて計算する
2. 宴会の席や、正月のような特別の日でも自分の指示カロリーを考えて食事を取る
3. 外食のメニューを指示カロリーの範囲内でバランスを考えて選ぶ
4. 指示カロリーの食事を自分で計算して実際につくる

代理的経験(1回目)



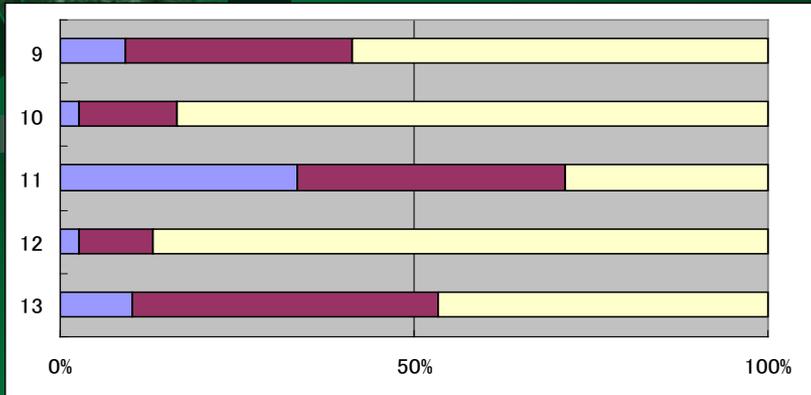
(2回目)



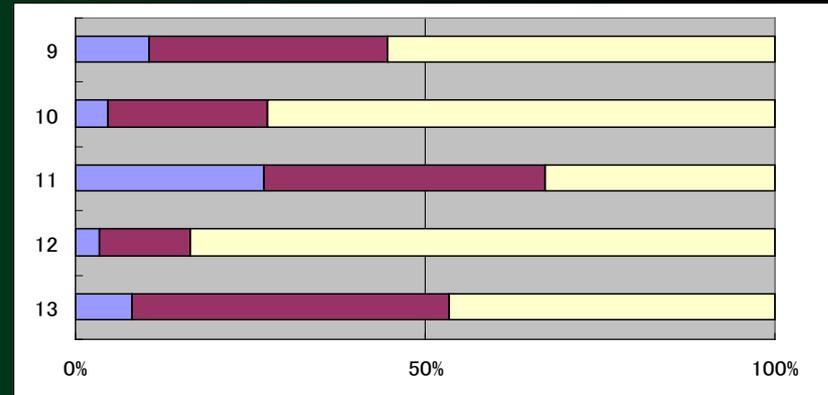
5. 食事療法を続ける工夫を同病者から聞く
6. 私と似た生活環境で食事療法が守れている人の話を聞く
7. 食事療法に成功している人のビデオやテレビを見る
8. 食事療法に成功している同病者の体験談を聞く

- よく体験する (Blue)
- たまに体験する (Purple)
- まったく体験しない (Yellow)

言語的説得(1回目)

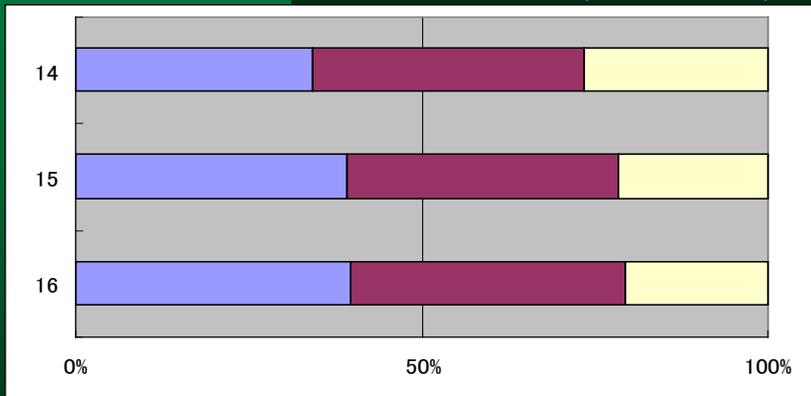


(2回目)

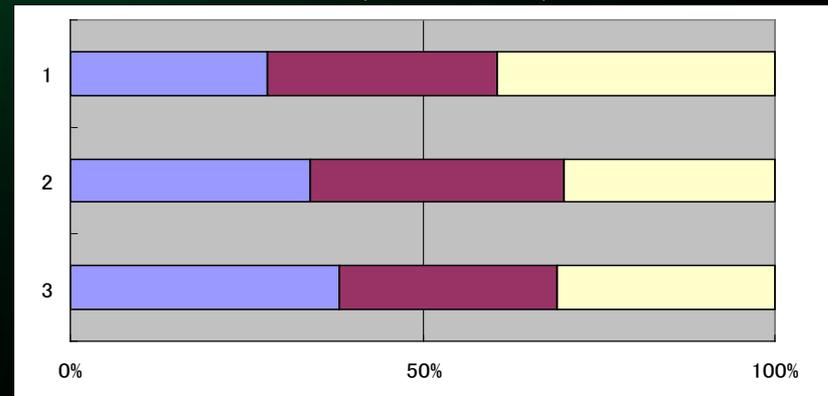


- 9.友人から食事療法を続けていて感心だとほめられる
- 10.医師から食事療法についてほめられる
- 11.家族から食事療法を守るようにと励まされる
- 12.看護婦から食事療法についてほめられる
- 13.栄養士から食事療法について指導を受ける

生理的情動的状态(1回目)



(2回目)



- 14.食事療法を守っていると、自覚症状がよくなる
- 15.食事療法を守っていると、健康的な気分になる
- 16.食事療法をしていると、体の調子がいい

- よく体験する
- たまに体験する
- まったく体験しない



結 果 1

- 第1回対象者の背景は男性83名、女性37名、総数120名（有効回答率92.3%）であり、年齢は 57.75 ± 11.97 歳。治療法は食事療法のみが22名、経口血糖降下剤使用者が85名、インスリン使用者が25名であった。HbA1cは $7.0 \pm 1.1\%$ 、BMIは $24.71 \pm 3.96\%$ 、病歴は平均 8.8 ± 6.3 年。合併症は神経障害68名、網膜症27名、腎症29名であった。自己効力感刺激要因とその体験度の結果として、「遂行行動の達成」は〈1日の食事内容を食品交換表の表1～表6、付録に分けて計算する〉〈指示カロリーの食事を自分で計算して作る〉を体験したことがあると答えたものは5割前後、〈宴会の席や正月のような特別の日でも自分の指示カロリーを考えて食事を取る〉もしくは〈外食のメニューを指示カロリーの範囲内でバランスを考えて選ぶ〉を体験したことがあると答えたものは7割以上であった。「代理的経験」は4つの項目すべてにおいて半数以上が体験していないと回答している。



結 果 2

- HbA1c6.9%以下をコントロール良好群、7.0以上を不良群として統計分析を行ったところ、「遂行行動の達成」「代理的経験」において有意差がみられた($p \leq 0.05$)。「言語的説得」は家族からの励ましは7割以上が体験しているが、医療者からの「言語的説得」は8割以上が体験していないと回答している。「生理的情動的状态」は食事療法を守ることによって7割以上が身体的、精神的に軽快感を持ったことがあることがわかった。



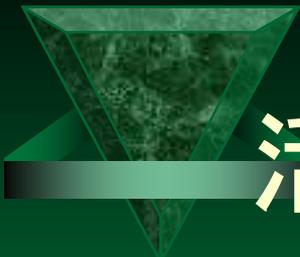
第1回調査結果からの考案

- ▼ この結果からいえることは、「代理的経験」と医療従事者からの「言語的説得」に関する情報が少ないということであった。
- ▼ 「代理的経験」によって自己効力を高めるアプローチとしては患者同士が各々のセルフケアの方法や糖尿病に対する思いを語りあえるような会の企画や、患者同士の情報交換できる場をつくるといった方向性が必要がある。
- ▼ 医療者からの「言語的説得」に関しては、患者行動を医学データーからだけでなく行動、心理を評価できるスタッフのスキルアップを図る必要がある。



活動内容1 患者会立ち上げ

- ▼ 平成16年4月より患者会「やまどり倶楽部」を結成し患者同士がセルフケアの方法や糖尿病に関する思いを語りあえる会を発足させた。
- ▼ 第一回の企画において、市内の「あやめの里」へハイキングに行きました。
スタッフを含め、総勢19名の参加。
- ▼ ハイキングの様子を、クリニック内に掲示し、患者会の様子を紹介。
- ▼ 現在も、掲示板を待ち時間に見ていただき、入会者が少しずつ増加中。(9名増加)
- ▼ 患者さんの中には、「楽しそうだからいきたいけどまだ入会までは…」とためらう方もいるので、イベントに参加だけでもできるように、会に入会していない方も気軽に参加できるように声をかけている。(同じ、悩みを気軽に話せる場であることを、スタッフのほうから話している。)
- ▼ 現在は、スタッフが企画・運営をしていますが、今後患者さん同士の絆ができれば運営も自主的に行っていけるよう働きかけていこうと考えてる。
- ▼ 今後スタッフとして、患者さんの会への要望や、満足度についてアンケートを行い、よりよい交流の場を提供していけるよう検討していきたいと考えている。



活動内容2 勉強会立ち上げ

- ▼ H16年3月より、神奈川地区のクリニック、病院の糖尿病スタッフ、行政（保健師）を対象とした病勉強会「やまどり糖尿病指導コンセンサス」を立ちあげた。

詳細については、協同演者の演題番号109の示説にあります。